ピアホームだより

2023. 6. 10

中井久夫の治療文化論を読む

前回の「最終講義」に続き、「治療文化論」に触れてみたいと思います。但し、原著に当たったわけではなく、NHK、Eテレ番組、100分ｄｅ名著で斉藤環さんの解説をベースにしています。

病気を捉え方には、普遍症候群と文化的症候群の捉え方があるそうですが、中井先生は、それらに治まり切れない個人症候群という考えを提示しました。

普遍的症候群とは、通常用いられているＤＳＭ（アメリカ精神医学会の編集の疾病分類)、また、ＷＨＯの国際疾病分類（ＩＣＤ）等を言います。

文化的症候群とは、精神疾患は身体疾患と異なり、文化や個人史といったローカルな特性の影響を受けやすいという特徴から捉えられた症候群です。→文化依存症候群、ヨーロッパにおいても、かつては、地域特有の病を持っていました。最近の例でいえば、摂食障害は、文化依存症候群の一つとする見方が広がっています。やせていることが美しいとする欧米的価値観です。日本では、対人恐怖があるそうです。これは、「世間体を気にする」という日本の文化を反映したものではないかと考えられています。また、現在日本のコミュ力偏重社会において、ちょっと空気が読めないだけで精神疾患の様に扱われてしまう傾向があります。「アスペルガー症候群」は、今や診断名として使用されるのは、日本ぐらいだそうです。

中井久夫によると、文化依存症候群よりさらに細分化された病、ある個人にしか該当しない病である**個人症候群**として、創造の病、妖精の病いなどが紹介されています。

創造の病として、天理教を創始した中山ミキを挙げています。彼女は家族的困苦を一身に背負って超人的な労働を耐え忍んだ挙句、ある日に王たちとなって「われは天理王命なるぞ」と宣言した人です。統合失調症と捉えきれないものがあります。

また、妖精の病の体験を語っています。中井久夫が診療した大学４年の女学生の症状です。先生は、単純に統合失調症と診断せず、寄り添い、お話しを共有することでお薬を使うことなく回復したそうです。

治療文化の多様な形態

中井は、各症候群に対応する多様な治療文化を、非職業的治療文化と職業的治療文化に分け考察しました。

ひとり治療文化として。統合失調症の特徴的症状でもある独語の効用面を説きました。家庭治療文化として、中国の四世同堂大家族の効用を説き、小コミュニティ治療文化として、マッサージ師等のケアの価値を説きました。職業的治療文化として、シャーマニズムやアルコール依存治療のＡ・Ａの価値を見出しました。

「医者は患者の弁護士である。医者は患者以外の何ものをも弁護してはならない」

フロイトの金言であり中井先生の想い。

6月の予定

6月10日:ピア事業継承候補職員面接